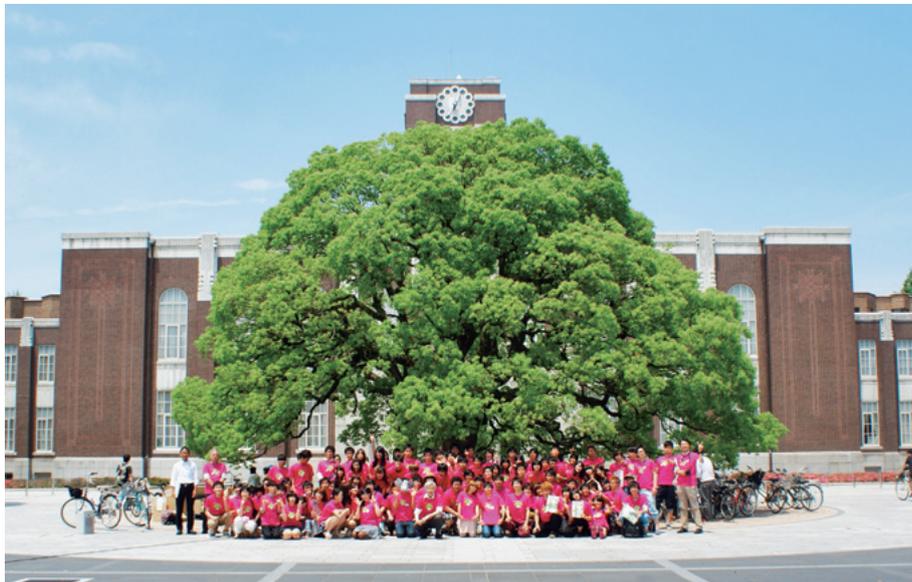




# 京大広報

No. 702

2014.7



エコ〜るど京大のキックオフの様子 ー関連記事 本文4234ページー

## 目次

### 〈大学の動き〉

- 次期総長候補者に山極壽一理学研究科教授を選出……………4222
- 京都の交通政策に係る京都府との連携協定調印式を举行……………4223
- 総長主催「外国人留学生歓迎パーティー」を開催……………4223
- 京都大学孜孜賞表彰式を举行……………4224
- 名誉教授懇談会を開催……………4224
- タイ王国・バンコクにて「京都大学 ASEAN 拠点」開所式を举行……………4225

### 〈部局の動き〉

- 生存圏研究所創立10周年記念行事を举行……………4226

### 〈寸言〉

- 方丈記随想 福岡 伸一……………4227

### 〈随想〉

- 思いがけない中国での研究指導 名誉教授 伊東 隆夫……………4228

### 〈洛書〉

- 科学者を目指す 本川 雅治……………4229

### 〈話題〉

- 宇治キャンパスで「平成26年度新任教職員および新入院生等のための安全衛生教育」を開催……………4230
- 「竹の環(わ)プロジェクト」を開催……………4230
- 人間の安全保障開発連携教育ユニットがサマースクール「2014年京都研修プログラム」を実施……………4231
- シンポジウム「シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン 8」を開催……………4232
- アジア研究教育拠点事業第7回ステアリング委員会を開催……………4232
- 桂キャンパス消防訓練を実施……………4233
- エコ〜るど京大2014を開催……………4234
- 平成26年度京都大学創立記念行事音楽会を開催……………4235

### 〈計報〉……………4235

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 大学の動き

## 次期総長候補者に山極壽一理学研究科教授(前理学研究科長・理学部長)を選出

現総長の任期満了(9月30日)に伴う次期総長候補者の選考が行われ、7月4日開催の総長選考会議による第二次選考の結果、山極壽一理学研究科教授(前理学研究科長・理学部長)が選出された。

総長選考会議は、教育研究評議会から推薦された学内予備候補者10名ならびに学外機関(大学等)の長から推薦のあった者について6月19日、21日に第一次選考を行い、第一次総長候補者6名を選出した。この第一次総長候補者について7月3日に学内の意向調査が行われ、7月4日の第二次選考において意向調査の結果を基礎に、第一次総長候補者に関する事項を総合的に判断し、総長候補者を決定した。

なお、任期は10月1日から平成32年9月30日までの6年間となっている。



## 総長候補者の選考状況

## 1. 総長候補者

山 極 壽 一(理学研究科)

## 選考理由

同氏は、教学と経営の両立、成長プロセスとしての教育の推進、京都という地から世界に開いた大学の魅力の発信、財政基盤の確立、現総長の下での成果を受け、京都大学の未来を切り拓く改革を推進すること等について尽力することを表明している。また、学内構成員の信頼も受けており、総長選考会議が策定した「京都大学の基本理念と望まれる総長像」に掲げている、世界に冠たる大学としての地位を確立するトップリーダーにふさわしいと判断し、第26代京都大学総長候補者として決定した。

## 2. 第一次総長候補者

候補者氏名(五十音順)

北 野 正 雄(工学研究科)

佐 藤 直 樹(化学研究所)

三 嶋 理 晃(理 事)

湊 長 博(医学研究科)

村 中 孝 史(国際高等教育院)

山 極 壽 一(理学研究科)

## 選考理由

総長選考会議は、このたびの総長選考において策定した「京都大学の基本理念と望まれる総長像」にある、活力ある教育研究の場の実現、組織内の適切な資源配分やリーダーとしてのあるべき姿などについてそれぞれのビジョンが示され、総長候補者たるべき見識を有すると考えられることから、上記6名を第一次総長候補者として選考した。

## 3. 学外機関(大学等)の長への総長候補適任者推薦依頼数・結果

・推薦依頼先数：国外19機関

・推薦結果：国外1件

## 4. 総長選考日程

平成26年5月12日(月)：選考日程の公示

6月2日(月)：教育研究評議会から総長選考会議へ総長予備候補者の推薦

6月11日(水)：学外からの推薦受付締切

6月19日(木)、総長選考会議(第一次選考)

21日(土)：

7月3日(木)：意向調査実施

7月4日(金)：総長選考会議(第二次選考)

総長候補者の決定

## 山極壽一理学研究科教授の略歴

生 年 月 日 昭和27年2月21日生(62歳)

昭和50年3月 京都大学理学部卒業

昭和52年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了

昭和55年3月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程研究指導認定

昭和55年5月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程退学

昭和55年6月 日本学術振興会奨励研究員

昭和57年4月 京都大学研修員

昭和58年1月 財団法人日本モンキーセンターリサーチフェロー

昭和63年7月 京都大学霊長類研究所助手

平成10年1月 京都大学大学院理学研究科助教授

平成14年7月 京都大学大学院理学研究科教授(現在に至る)

平成21年4月 京都大学教育研究評議会評議員(平成23年3月まで)

平成23年4月 京都大学大学院理学研究科長・理学部長(平成25年3月まで)

平成24年4月 京都大学経営協議会委員(平成25年3月まで)

(総務部)

## 京都の交通政策に係る京都府との連携協定調印式を挙

京都大学は京都府と、4月28日(月)に京都の交通政策に係る連携協定を締結した。

工学研究科では、平成21年度から25年度まで、科学技術総合推進費補助金による「地球再生人材創出拠点の形成」プログラムに採択され、「低炭素都市圏政策ユニット」を設置し、経営管理大学院と共同で「都市・交通政策を担う実務者の人材育成」と「自治体の都市・交通分野の政策支援」を行ってきた。プログラム終了後の今般、京都府と連携してこの事業をさらに発展・継続させ、京都の歴史と文化を保ちながら、京都議定書が採択された地として、環境負荷が小さく、世界に誇れる京都らしい先進的な交通環境を構築することを目的として、この協定の調印に至った。

調印式では、ユニット代表者の中川 大 教授がこれまでの経過等を説明した後、松本 紘 総長と山田啓二 京都府知事により協定書への署名が行われた。続いて、山田知事より現在の交通政策の課題

とこの協定による解決への期待が述べられ、松本総長からは、府と連携して新しい政策を打ち出し、大学の使命の一つである研究成果を社会へ還元する役割を果たしたいとの挨拶があった。

この協定により本学では、5月1日付けでユニット名を「交通政策研究ユニット」と改称し、京都府が提示する交通課題に対して先進的な交通政策の企画・立案を支援するとともに、世界的視野を持った交通政策を担う人材育成を行い、交通政策におけるパラダイムシフトを起こすことを目指す。

(大学院工学研究科)



協定に署名した松本総長(左)と山田知事(右)

## 総長主催「外国人留学生歓迎パーティー」を開催

6月17日(火)、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、総長主催「外国人留学生歓迎パーティー」を開催した。

この歓迎パーティーは昭和36年から開催されており、今年も、理事・副学長をはじめ、部局長、指導教員および学外団体等の関係者を含む76名、ならびに新入留学生292名が出席し、和やかな雰囲気の中で、留学生を囲んで交流がおこなわれた。

松本 紘 総長の代理を務めた赤松明彦 学生担当理事・副学長による歓迎挨拶の後、新入留学生を代表



新入留学生によるスピーチ

してイギリス出身のトーマス・ヒートンさん(日本語・日本文化研究研修生)が流暢な日本語と英語による御礼のスピーチを行い、森 純一 国際交流推進機構長による乾杯の発声により歓迎会は始まった。

また、恒例の歓迎イベントでは、本学ダンスチーム「彩京前線」による「京炎!そでふれ」の演舞があった。学生ダンサーたちは現代風アレンジされた着物の衣装を身につけ、迫力ある踊りを披露し、会場は一気に沸き立った。

続いて、ジャグリングサークルの「ジャグリング・ドーナツ」による演技が披露され、巧みな技とコミカルな動きで留学生を惹きつけた。

次に、中国からの留学生を中



本学ダンスチーム「彩京前線」による演舞「京炎!そでふれ」



挨拶する赤松理事・副学長

心としたグループが歌とダンスを披露した後、モンゴルからの留学生の音頭によって、有志の留学生が「幸せなら手をたたこう」を各国の言語で歌い、会場が一体となって盛り上がった。

歓迎イベント終了後も、記念撮影を交えつつ楽しみながら交流を深め、たくさんの笑い声の中、閉会となった。

(研究国際部)

## 京都大学孜孜賞表彰式を挙

本学における教育、研究、社会貢献等の業績が極めて顕著であると認められた本学教員を表彰することにより、本学の一層の発展を期することを目的として、平成24年に創設された京都大学孜孜賞の第2回目の表彰式を、6月24日(火)に百周年時計台記念館迎賓室で挙



前列左から、稲葉副学長、松本総長、江崎理事・副学長、中島教授、後列左から、松沢教授、森脇理事補、中村理事補

最初に、江崎信芳 総務・企画・情報環境担当理事・副学長による開会の辞が述べられ、引き続き、松本 紘 総長から受賞者に表彰状と副賞が授与され、受賞者への祝辞が述べられた。

最後に、江崎理事・副学長より閉会の辞が述べられた後、記念撮影と懇談が行われ、終始盛会のうちに終了した。

受賞者は以下のとおりである。(50音順)

部局名	職名	氏名
生命科学研究科	副学長・教授	稲葉 カヨ
数理解析研究所	教授	中島 啓
情報学研究科	理事補・教授	中村 佳正
霊長類研究所	教授	松沢 哲郎
理学研究科	理事補・教授	森脇 淳

(総務部)

## 名誉教授懇談会を開催

6月27日(金)、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて名誉教授懇談会を開催し、72名の名誉教授の他、理事、副学長、部局長等あわせて90名が出席した。

懇談会は、松本 紘 総長の代理を務めた西阪 昇 財務・施設・環境安全保健担当理事・副学長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、沢田敏男元総長による乾杯の発声により始まった。



乾杯の発声をする沢田元総長

会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告等に話が弾み、盛会のうちに執り行われた。



懇談会の様子

(総務部)

## タイ王国・バンコクにて「京都大学 ASEAN 拠点」開所式を挙

強固で確実な国際化を展開するために、本学が平成25年6月に策定した国際戦略「2x by 2020」に基づき、タイ王国・バンコクに「京都大学 ASEAN拠点 (Kyoto University ASEAN Center)」を開設した。

6月28日(土)、拠点開設に伴い、学内外の関係者の臨席のもと、バンコク市内のグランドミレニウムホテルにて、開所式を挙

行式には、日本・タイおよびASEAN各国の政府関係者、大学間交流協定校の学長などの大学関係者ならびに在タイ民間企業関係者等200名余りの出席があった。

開所式式典では、三嶋理晃 国際担当理事・副学長の挨拶、松本 紘 総長の式辞に続き、佐藤重和在タイ日本国大使館特命全権大使、土屋定之 文部科学審議官、白石 隆 政策研究大学院大学学長、スパット チャンパトン タイ王国文部省高等教育委員会事務次官補佐、井内摂男 日本貿易振興機構(ジェトロ)バンコク事務所長、根岸 靖 アジア開発銀行(ADB)タイ・カントリーディレクターから祝辞をいただいた。その後のレセプションでは、今後のASEAN各国との交流推進に向けた歓談が行われた。

また、式典に先立ち、ASEAN拠点事務所にお



ASEAN拠点事務所におけるテープカットの様子

て、柴山 守 同拠点所長の司会のもと、土屋文部科学審議官、小林茂紀 在タイ日本国大使館参事官、タイ人元留学生による同窓会である京都ユニオンクラブのスッチャリット コーンタナクルヴォン会長、松本総長、三嶋理事・副学長、吉川 潔 研究担当理事・副学長、小寺秀俊 渉外・産官学連携担当理事・副学長、森 純一 国際交流推進機構長の8名がテープカットを行い、拠点開設を祝った。その後、内覧会が行われ、テープカット参加者を含め、新しい事務所が披露された。

今後、本拠点は全学的な施設としての運用と関係機関との相互協力の場として活用していく予定である。



開所式終了後の全体写真

(研究国際部)

## 部局の動き

## 生存圏研究所創立10周年記念行事を挙げる

生存圏研究所は創立10周年を記念して、記念講演会・記念式典・記念祝賀会を6月6日(金)に宇治おうばくプラザにおいて挙げるした。

記念講演会、記念式典には約250名の参加があり、記念講演会では、津田敏隆 生存圏研究所長より「生存圏科学への招待－10年間の成果概要－」と題して10周年記念出版『生存圏科学への招待』の内容を中心に紹介があり、続いて佐藤哲也 核融合科学研究所名誉教授より「近代西洋文明の限界－パラダイム転換のとき－」、谷田貝光克 東京大学名誉教授より「快適環境づくりを目指して－植物成分研究の現状と未来－」と題した講演が行われた。



記念講演会の様子

記念式典では、津田研究所長の式辞、松本 紘 総長の祝辞に続き、木村直樹 文部科学省研究振興局学術機関課長、大西 隆 日本学術会議会長から祝



来賓等による記念の鏡開き

辞が述べられ、生存圏科学の共同利用・共同研究拠点として世界の中心に立って教育・研究を先導していくことへの期待が寄せられた。併せて国内外の連携機関からの祝辞も披露された。

引き続き開催された記念祝賀会では、則元 京 名誉教授、川井秀一 大学院総合生存学館長より挨拶があり、連携機関として藤井良一 名古屋大学理事・副総長、生存圏科学を紹介するマンガ制作で連携している武田恵司 京都精華大



祝賀会における記念マンガ本『生存圏って何??』紹介パネル

学副学長から祝辞が述べられた。続いて吉川 潔 研究担当理事・副学長から乾杯の発声があり、学内外の150名を超える参加者を得て盛況のうちに終了した。



記念講演会・式典参加者による記念撮影

(生存圏研究所)

## 寸言

## 方丈記随想

福岡 伸一

最近、玄侑宗久の『無常という力』を読んだ。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし」



あまりに有名な鴨長明「方丈記」の冒頭である。この世のすべてのもの、－生物であろうと無生物であろうと－、あらゆるものは流転し、絶え間なく移り変わっている。いまからおよそ800年前、平安時代が終わりを告げ、新たな武家社会が形作られようとする時代の激変期にあって、このような動的な世界観に長明が到達していたことはある意味で驚かされ、別の意味ではそのような不安定さと隣り合わせの時代だったのかとも思う。ところで「方丈記」のこの先の記述をもうすこしじっくり読んだ人はどれくらいいるだろう。賀茂神社の高官の子弟として生まれた長明の人生は、順調に見えながら、人間関係の摩擦や天災などに翻弄されるまま、だんだん変転していく。あるときはシニカルになり、あるときは斜に構え、また別のときには初心に帰ろうと努力して、長明は絶えず自分の心のあり方、人生の過ごし方を見つめなおす。芥川賞作家にして福島県福聚寺の僧侶でもある玄侑宗久は、方丈記をゆっくり読み解きながら、現在の私たち、特に3・11以降を生きる我々にとって、何がどのような教訓として汲み取れるかを優しい語り口でひもといていく。それが『無常という力』である。著者とは一度、ゆっくり対談をしたことがある（『動的平衡ダイアログ』収録）。私たちは「方丈記は最初もいけれど、終わり方もいいんですよ」という意見で一致した。最後に方丈の草庵に恬淡と暮らしつつ、長明は念仏を二、三回口にする。この二、三回というところ、－執着もないが、かといって全くの虚無でもない－、そこがよいと私たちは感じたのである。

ところで方丈記後半は、京都東南部、木幡山や巨椋池が見渡せる山中に長明が編んだ庵が舞台となる。

私はその地名の響きを聞いてとても懐かしい気持ちになった。

大学4年、大学院5年、その後、米国での数年間の留学を挟んで、再び教員として10年あまり、京都大学にお世話になった。思えば、東京出身の私は京都に20年も暮らしたことになる。京都大学から得たものはとても大きかったが、京都大学に対して私が成し得たことはどれもとるに足りないことばかりだった。

国際交流の仕事をしていたある日、新築された大学の留学生宿舎の主事を拝命することになった。主事とは留学生のお世話係・よろず相談係であり、宿舎の一室に住み込むことが義務づけられていた。私はそこがいったいどんな場所なのか見学に行ってみることにした。ちょうどキャンパス間を結ぶバス路線に沿って、山科、醍醐、六地蔵と南下し、その昔、鴨長明が方丈の仮小屋を営んだ日野の山里の、そのまた向こうの、宇治の三番割というひなびた場所にそれはあった。

交通の便こそやや不便なもの、建物は新築で、世界中からはるばる京都大学に学びにやって来た実にさまざまな国の留学生たちと楽しく交流する生活が開始された。にぎやかなハロウィンの仮装パーティーがあり、ときに住民間の騒音トラブルを仲裁したりもした。こんなこともあった。某国の男子学生が、日本でガールフレンドを作り、首尾よくこっそり部屋にご招待したところまではよかったのだが（独身寮は外来者の入室を禁止していたからほんとうはよろしくはないのだが）、当の女子が急に体調を崩し、パニックになった男子学生が青くなって助けを求めてきた。私はすぐに救急車を呼んで女子を病院に救急搬送してもらった。大事には至らずほっとしたが、今にして思えば、ひょっとすると、あれは女子の緊急避難的演技だったのかもしれない……。宿舎の向こう側には宇治の山々の裾野が迫っており、初夏にはホタルが乱舞した。秋の夜には庭でタヌキの集団が大運動会を開催していた。

着任した春に、私は敷地の一角に記念樹として細い桜を植樹した。その後、私は京都を離れ、以来忙しさに追われて宇治を再訪したことがない。今頃、あの木はどうなっているだろう。健やかに成長していればいいのだが。

（ふくおか しんいち 生物学者 青山学院大学教授・ロックフェラー大学客員教授、昭和57年農学部卒業 昭和62年大学院農学研究科博士課程修了）

## 随想

## 思いがけない中国での研究指導

名誉教授 伊東 隆夫

退職後のいわゆる第二の研究生活を中国の大学で送ることは想像すらしなかった。最初に中国に足を踏み入れたのは1994年にさかのぼる。佛教大学の日中共同尼雅(ニヤ)遺跡学術研究機構からの誘いで、尼雅遺跡学術調査隊の一員として新疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠にある尼雅遺跡の調査に参加した。これが初めての中国訪問で、数日間砂漠の中でテント生活を送った。その後、他の隊員とともに2、3度ウルムチにある新疆文物考古研究所に足を運んで木製品に関する調査をおこなった。尼雅遺跡は玄奘三蔵が訪れたことやイギリスの探検家オーレル・スタインが発掘調査したことで知られる遺跡である。玄奘著の大唐西域記では沼があり、葦が生い茂っていたと記されているが、我々が踏査した範囲ではそれらは確認できていない。2000年前の多くの住居址に柱が林立している荒涼とした光景はいまだに脳裏に鮮明に刻まれている。あれからもう20年になるが、あの時の体験は筆者のその後の中国における木の文化の調査・研究の原点となっている。



話を戻すと、2006年に定年で退職したが、定年前の10年余り前、中国における木の文化の研究を進めるに当たって、中国に生育する多様な樹種を調べる必要があると思い、中国の研究者との交流が始まった。毎年夏に1人か2人、多いときには一度に5人重なって招待したこともあった。多い方で10年ほど連続して来所してくれた。最低ひと月、多い時で3か月ほど滞在してくれて共同研究をおこなった。今から考えれば、よくぞ招待する経費が続いたものだと思う。

そうこうするうちに、退職となったが、共同研究で親しくなった中国の先生から、中国の大学で年に3か月ほど研究指導をしてくれないかとの打診があった。中国語もわからず最初は戸惑ったが、旅費・滞在費は先方が負担するとのことであり、未知の経験でもあり、2年ほどとのことであったのでお受けす

ることにした。当初は講義をおこなう頻度が高かったが、ジャパニーズイングリッシュでの講義を学生諸君がどの程度理解してくれているのかに疑問を感じ、途中から院生の修士論文の研究および実験の指導を引き受けるようになった。日本で習得した手技手法を中国の学生は周知していなかったため、きつと実のある指導につながるの信念からであった。

いざ始めてみると、京大時代の充実した研究設備とはかけ離れた環境で指導しなければならず、戸惑うことが多かった。この時ばかりは現役時代が如何に恵まれた研究環境にあったかが思い知らされた。基本的に顕微鏡の観察だけで実行可能な研究課題を用意するように努めざるを得ず、頭脳の活性化には役立ったように思う。院生には研究の目的や方法を丁寧に教えればほぼ問題なく忠実に実験を行ってくれることもわかった。何よりも若い院生と実験を通じてコミュニケーションの機会が多くなり、おのずから互いの信頼関係ができあがるのを感じた。異国の院生と研究を通じて交流できることに、現役時代には感じなかったやり甲斐も感じた。中国での研究指導はずらずと続き、すでに7年半が経過した。これまで指導してきた院生は述べ10名にのぼる。いずれの国においても、直接指導した学生諸君が巣立ち、立派に社会で活躍してくれるのを見届けることは研究者として他に代えがたい喜びである。

この間、研究成果の発表のために中国国内の関連の学会に参加し、幾多の大学に招待されて講演を行った。また、木の文化に関わる調査に出かけ、中国の様々な都市を訪問した。その都度、行く先々で丁寧な歓待を受け、違った文化や風俗に出会えたことも、中国という巨大な国の現状を垣間みることができ、中国の人々の温かさや多様な文化を知る機会になった。

筆者と同様に日本の研究者による研究指導が中国全土で広く行われていることと想像する。さらに、日本語は中国のほとんどの大学で英語に続く第二外国語となり、日本人が教育に携わっている。折しも日中関係が穏やかでない時期であるが、多くの先生方の努力を通じた日中間のささやかな人的交流が、多少なりとも両国の融和につながることを期待したい。

(いとう たかお 平成18年退職 元生存圏研究所教授 専門は木質細胞構造機能学)

（いとう たかお 平成18年退職 元生存圏研究所教授 専門は木質細胞構造機能学）

## 洛書

## 科学者を目指す

本川 雅治



「私は科学を志すものである」。私が理学部三回生21歳の時にノートに書いた言葉である。25年前に京都大学に入学し、科学者を目指した私は「科学とは何か」を考えていた。そして、科学をその外から捉えるのではなく、自分が科学界の中に位置し、何らかの研究に取り組みながら科学者としての役割を果たし、科学を見つめるべきだ、との認識にその頃に到達した。自分自身が、その渦中に入り、要素として組み込まれながら反応を起こすという発想は、当時読んだ『生物の世界』で知られる今西錦司、『あいだ』論の木村 敏といった京都大学出身の科学者達の多くの著作の影響を受けた。ところで、私は大学に入学した時から「科学者」と「研究者」を明確に区別していた。現在の私自身の認識でその違いを整理し直すと、科学者も研究者も研究をし、新しい発見を基に論文を発表する事が不可欠であるが、科学者には同時に論文出版を支える雑誌編集や査読、科学界での意思疎通を通じて科学界を運営・維持し、科学界と社会や政府との繋がりや関わりを対話によって実現するといった多様な役割が与えられ、求められている。大学院に入り、動物系統分類学の道に進んだが、当時も研究者でなく、科学者に成りたいという思いを抱いていた。

そんな二十数年前のことを、なぜ最近になって思い出したのだろうか。私自身の科学者の役割が年齢につれて増す一方、日本には、そして世界にも、立派な研究者は事欠かないが、科学界を担う科学者が近年になって激減していると感じ、科学や科学界について思索する時間が多くなったことが背景にある。こうした状況が継続すると、近未来に科学界の維持が困難になり、科学者が、そして研究者も活躍する世界が無くなるに違いない。同時に科学界と密接な繋がりや関わりを持つ人類社会の持続にも大きな脅威である。一方で、最近の国や大学は、科学者に目

を向けず、研究者を増やす仕組みを作っていると感じる。論文不正が話題になるが、それは科学界が弱くなり、社会との繋がりどころか、科学者同士の対話すら崩壊の危機に瀕していることと無関係ではあるまい。研究者の理解不足や未熟さと絡めて不正が論じられることも多いが、不正は知識や技術という研究者の問題では無く、科学者の意思や信念に関わるのではないか。ともかく科学者は科学界に参画し、科学界そして人類社会の持続ある存続と発展を担う責務がある。そのために研究者ではなく、科学者を如何に持続的に輩出するかが、科学界に課された大きな使命である。もちろん、科学界は完璧ではない。科学者は科学界の中に身を置き、変革を目指すべきで、外から他人事として批評する立場にない。

私は、科学界が持続可能な発展、せめて現状維持を将来に実現するため、京都大学に夢や希望と意欲を抱いて入学した学部生、そして将来に入学を希求する人に「科学者を目指せ」と言いたい。若者は未熟者であるとの浅薄な考えを持つ人からは、荒唐無稽な誘いに映るに違いない。しかし21歳で科学者に成ると決断した私は、若い時の強固な意志こそが科学者への唯一のたくましい原動力になると確信する。

現在、私は総合博物館で動物学の研究を行いながら、科学者同士、そして科学者と社会の対話、科学者と科学界が担う役割について、再び考えを巡らしている。それでは大学生の時と大きく考えは変わったのだろうか。そうでもないようだ。いみじくも私の三回生時のノートには次の一節も書かれていた。

「科学に対する『ものの見方』は子供のうちに完成されるらしい。科学者たちは、その枠組みの中で研究をしているのだということだ」。

私は今でも科学者に成れたとは思わない。科学者は一生を賭して追究し続ける存在との見方に変わった。歴史が示すように好敵手との熾烈な相互作用も、科学者への途には不可欠である。次世代の科学者と、対話や科学界変革への共闘を期待し、現在も私は科学を志すものである。

(もとかわ まさはる 総合博物館准教授 専門は動物系統分類学 博物館科学)

## 話題

## 宇治キャンパスで「平成26年度新任教職員および新入院生等のための安全衛生教育」を開催

宇治キャンパスでは、4月24日(木)、宇治おうばくプラザ きはだホールにおいて、「平成26年度新任教職員および新入院生等のための安全衛生教育」を開催した。

この講習は、安全に職務や研究を行うために必要な安全衛生に関する知識を修得することを目的として、新たに宇治キャンパスで実習・研究を実施する学部4回生、大学院生および新規配属の教職員等を対象に毎年実施しているものである。

今年度、宇治事業場総括安全衛生管理者に就任した岸本泰明 エネルギー理工学研究所長による開会の挨拶に始まり、「宇治事業場の安全衛生」、「喫煙問題」、「危機管理・宇治地区の防災対策」、「健康管理と応急手当」、「生物実験及び放射線取扱」、「物理実験及び計算機関係」、「化学物質管理及び実験系廃棄物管理」、「実験排水」に関する説明があり、計264

名(学生177名、教職員87名)の受講者は熱心に耳を傾けていた。

また今年度は、宇治市東消防署の全面協力による「起震車」を使っでの地震体験コーナーも設けられ、約60名の参加者は実際の揺れの大きさを体感した。



起震車を使っでの地震体験コーナー

(宇治地区事務部)

## 「竹の環(わ)プロジェクト」を開催

5月10日(土)、桂キャンパスにおいて竹林保全ボランティア活動「竹の環プロジェクト」が開催された。



竹林内で間伐作業



東海自然歩道を散策

この「竹の環プロジェクト」は、桂キャンパスの竹林保全を通じて環境問題に取り組むボランティア活動で、本学、住友生命保険相互会社、京都モデルフォレスト協会および京都府が主催している。

当日はスタッフを含めて150

名余りが参加し、初夏の陽気の中、午前中は竹林の間伐作業や筍掘りに汗を流した。午後からは桂キャンパス近くの東海自然歩道を散策し、整備の行き届いた竹林を見学したほか、柴田昌三 地球環境学堂・学舎教授の講話があり、竹林を整備することの重要性について理解を深めることができた。



参加者で記念写真

(大学院工学研究科)

## 人間の安全保障開発連携教育ユニットがサマースクール「2014年京都研修プログラム」を実施

人間の安全保障開発連携教育ユニットは、5月12日(月)から5月24日(土)までの13日間、大学の世界展開力強化事業「『人間の安全保障』開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築」によるサマースクール「2014年京都研修プログラム」を実施し、タイのバンコクにあるカセサート大学の学部学生15名と教員3名を受け入れた。本プログラムは、国際交流推進機構との連携により農学部が実施している国際交流科目「変容する東南アジア—環境・生業・社会」(2014年9月1日～9月13日)に係る受入プログラムである。

参加学生は、秋津元輝准教授による講義「Agri-food World in Japan: Present and future」を聴講し、縄田栄治教授、神崎護教授、白岩立彦教授、飛奈裕美特定講師、大原有理 北部構内教務・図書課特定職員、瀬戸美穂同課職員の引率により、農学研究科実験圃場、同附属高槻農場、藤田林業、京都北



農学研究科実験圃場見学

山丸太生産協同組合、かやぶきの里、滋賀県大津・南部農業農村振興事務所、栗東市棚田稲作農家、京都府生物資源研究センター、京都府茶業研究所、サントリー京都ビール工場を訪問し、日本の農林業と環境について学んだ。また琵琶湖博物館では、琵琶湖と周辺地域の生態系および自然保護活動について学んだ。



清水寺を訪問

さらに、参加学生は、湯川志貴子 国際交流センター准教授による講義「京都の文化」を聴講し、友禅染や着物着付けの体験、金閣寺、清水寺、錦市場の訪問など、日本文化を体験した。

学生は五つのグループに分かれてディスカッションを行い、最終日の発表会で、研修を通して学んだことを発表した。

この研修には、分野を問わず、過去にカセサート大学を訪問した、あるいは、9月の研修(派遣)に参加予定の本学学部学生も多く参加し、タイの学生と交流を深めた。



送別会での集合写真

( 学際融合教育研究推進センター  
(人間の安全保障開発連携教育ユニット) )

## シンポジウム「シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン 8」を開催

5月23日(金)、男女共同参画推進センター主催のシンポジウム「シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン 8」～「日本の大学におけるダイバーシティ - 成果と課題 - : Global Perspectives on Diversity in Japanese Universities - Benefits and Challenges」を芝蘭会館別館(国際交流会館)で開催した。

「男女共同参画推進センター」は、本年4月に「男女共同参画推進室」と「女性研究者支援センター」を統合して誕生した。今回は、そのキックオフ・シンポジウムの意味も込め、グローバル化時代に羽ばたく外国人研究者を男女1名ずつ招き、日本の大学におけるダイバーシティと男女共同参画について英語で講演をいただいた。

山末英嗣 男女共同参画推進センター広報・相談・社会連携WG主査の司会進行のもと、稲葉カヨ男女共同参画担当副学長の挨拶の後、シーレ・ニコーマック (Sile Nic Chormaic) 沖縄科学技術大学院大学准教授が「日本の大学の変革のために - 女性で外国人の教員の視点から - (Breaking the trend in Japanese universities - viewpoint of a female and foreign faculty member)」, ベンジャミン・マクレラン (Benjamin McLellan) エネルギー科学研究科准教授

が、「外国人教員 - 自由とフラストレーション (Foreign faculty - freedom and frustration)」というテーマで講演を行った。

講演後の質疑応答・ディスカッションでは、名刺デザインを例に「自由」についてや、「グローバル30」の理想と課題などについて活発な意見交換が行われた。最後に、犬塚典子 同センター特定教授の挨拶があり、閉会した。



ニコーマック准教授とマクレラン准教授

( 男女共同参画推進本部  
( 男女共同参画推進センター ) )

## アジア研究教育拠点事業第7回ステアリング委員会を開催

工学研究科を拠点機関として実施している日本学術振興会(JSPS)アジア研究教育拠点事業「リスク評価に基づくアジア型統合的流域管理のための研究教育拠点」の一環として、5月26日(月)にマレーシア(マラッカ)にて第7回ステアリング委員会を開催した。

日本からは、コーディネーターの清水芳久教授をはじめとする運営メンバーと事務部職員の計12名(Skype利用の参加を含む)が出席し、マレーシアからは、マラヤ大学のAwang Bulgiba Awang Mahmud 副学長補佐(研究開発担当)、コーディネーターのNik Meriam Nik Sulaiman教授を中心に10名が出席



参加者の集合写真

した。

本事業は平成23年度に開始した5年間の事業で、アジアでの流域管理・リスク管理に焦点を当て、新たな発見が予測される重要課題に対して解決策を見いだすとともに、研究

者・技術者のための教育プログラムを作成し、育成した若手研究者を次世代の指導者とすることで継続的な研究・人材育成が可能なリソースを築くことを目標としている。

今回の委員会では、日本とマレーシア双方の環境リスクと流域管理に関する知見の共有と、関係各所への情報提供を目的としたテキストブック作成の進捗状況が各グループリーダー等から報告された。また、会議の翌日にはマラヤ大学構内で浄化プロジェクトが実施されている湖の視察も行われ、視察後、マラヤ大学の研究者と活発な議論が交わされた。

今年度は秋にマレーシアで第4回包括シンポジウム、冬は日本で第8回ステアリング委員会を開催す



マラヤ大学構内の湖の視察

る予定であり、今後も引き続き両国の協力による一層の研究交流事業展開が期待されている。

(大学院工学研究科)

## 桂キャンパス消防訓練を実施

6月13日(金)、西京消防署の指導のもと桂キャンパス消防訓練を実施し、約50名が参加した。

今回の訓練は、危険物安全週間に合わせて、桂キャンパスAクラスターの危険物倉庫近辺で火災が発生したと想定し、模擬消火器を用いた初期消火訓練や緊急時連絡網にもとづく通報連絡訓練の後、消防車両による放水を行った。

訓練終了後は、桂キャンパス自衛消防隊長である

小西康行事務部長の挨拶のあと、環境安全衛生センター副センター長の橋本 訓講師から危険物の取扱いに関する注意事項等の説明があった。

最後に、西京消防署から今回の訓練についての講評に続いて、消防署の活動に必要な情報提供の重要性について協力依頼があった。

桂キャンパスでは、今後も防火・防災に関する啓蒙・周知徹底を図っていく。



消防署による放水訓練



参加者の様子

(大学院工学研究科)

## エコ〜ると京大2014を開催

全員参加型で環境負荷を低減した持続可能なキャンパスの実現を目指す強化イベントとして、環境月間である6月にあわせ、6月2日(月)から30日(月)の1ヶ月間、「エコ〜ると京大2014」(※)を開催し、吉田キャンパスを中心に様々な企画を展開した。

まず2日には、取組のシンボルキャラクターである「くすちゃん」



のTシャツを着た、学生・教職員が昼時のクスノキ前に100名以上集まり、1ヶ月間のキックオフ宣言を行った。



オープンラボで、研究者と気軽に会話を楽しむ参加者の様子

2日から13日(金)の間は、生協ルネ1Fに、「京都大学で環境学を考える研

究者たち」のオープンラボが出現し、学生たちが気軽に研究者に話しかけ、お茶やコーヒーを飲みながら

語らう姿が見られた。9日(月)から後半にかけては、エコ〜ると京大PRのための、10以上の学内サークル等による「エコパフォーマンス」がクスノキ前にて連日行われた。歌あり、ダンスあり、動物とのふれあいありと、



学生サークルや留学生によるエコパフォーマンス

ユニークな表現に、多くの人が足を止めて見入った。

折り返し日にあたる15日(日)には、学生が中心となりフリーマーケットを行った。学内で育てた野菜の販売やフェアト



フリーマーケットで人気の野菜はすぐに完売

レードの発信ブースなども設けられ、人だかりができるほどの盛況ぶりであった。

後半は、深く環境問題を考えたり、自らのアイデアを披露する企画が目白押しであった。まず、21日(土)と28日(土)の2日間、環境問題を考える上で一押し映画を鑑賞する「グリーンスクリーン映画祭」を行った。29日(日)と30日(月)には、「先輩サステナビリティサロン」として、約20組の大学院生が、自分の環境研究やアイデア等を口頭発表やビデオ作品等の形で表現した。そして30日には、サステナブルキャンパスを実現するためのアイデアを競うエココンペの発表・審査を行い、力の入った発表が続いた。優秀者には国内外研修や実施費用の支援を行うこととなった。

1ヶ月間、様々な企画を行うことにより、多くの人に少しずつエコに関する気づきや参加へのきっかけを与えることができた。今後もこれを継続し、エコキャンパス実現につなげていかなければならない。

※「エコ〜ると京大」とは、エコ×世界(ワールド)からの造語であり、「Think globally, Act locally, Feel in the Campus!」のメッセージをこめると同時に、京大の中でエコを学ぶ学校(Écoleとはフランス語で学校)を期間限定で開校する意味もこめたものである。

(環境安全保健機構)  
(環境科学センター)

## 平成26年度京都大学創立記念行事音楽会を開催

6月18日(水)の本学創立記念日を祝し、第58回京都大学創立記念行事音楽会「パイプオルガンの醍醐味」を6月13日(金)に京都コンサートホールで開催した。

演奏者の吉田 文氏は今回で2度目の出演となり、クラシックからミュージカルの定番まで解説を交えながら、厳かな演奏が繰り広げられた。

来場者からは、「初めてパイプオルガンの生演奏を聴いて感動した」、「最後に一緒に歌ったのもよかった」などの声があり、パイプオルガンと吉田さんの世界に大いに魅了された音楽会となった。



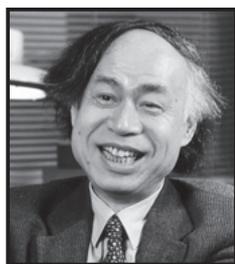
演奏の様子

(学務部)

## 訃報

このたび、<sup>ふか お しょういちろう</sup>深尾昌一郎名誉教授、<sup>かめ いただ お</sup>亀井節夫名誉教授、<sup>ふじなが た いちろう</sup>藤永太郎名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

### 深尾 昌一郎 名誉教授



深尾昌一郎先生は、5月3日逝去された。享年70。

先生は、昭和42年京都大学工学部電子工学科、同44年工学研究科修士課程電子工学専攻を修了し、工学部電気工学第2学科助手に着任、同49年京都大学工学博士の学位を授与された。昭和59年同講師、同60年超高層電波研究センター助教授、同63年同教授に昇任、宙空電波科学研究センターおよび生存圏研究所教授を経て、平成19年定年退職し、名誉教授の称号を授与された。同年東海大学総合科学技術研究所非常勤教授、平成20～24年福井工業大学工学部教授を務められた。

先生は、理学と工学の学際領域に「レーダー大気物理学」を確立された。昭和59年に革新的な『MUレーダー』を完成、全国共同利用を推進、大気波動・

乱流、超高層大気力学など広範な研究業績を挙げた。また、平成13年インドネシアの赤道直下に『赤道大気レーダー』を完成させた。応用面では気象庁の小型レーダー観測網「WINDAS」の基礎を築き、予報精度向上に貢献された。平成17年「気象と大気のレーダーリモートセンシング」を著した(平成25年英訳版を刊行)。

これらの業績による先生の主な受賞・受章は、平成6年日経地球環境技術賞、同14年島津賞、同16年情報通信月間推進協議会志田林三郎賞、同18年文部科学大臣表彰科学技術賞および大川出版賞、同20年紫綬褒章である。ご逝去にあたり従四位・瑞宝中綬章を受けられた。

「深尾昌一郎先生を偲ぶ会」が6月14日(土)に行われ、196名の参加者が先生のお人柄とご業績を偲んだ。

(生存圏研究所)

### 亀井 節夫 名誉教授

亀井節夫先生は、5月23日逝去された。享年88。

先生は、昭和24年3月東京大学理学部を卒業し、信州大学文理学部の文部教官、講師、助教授を経て、同38年12月京都大学理学部助教授に就任された。昭和41年10月同教授に昇任、地質学鉱物学教室の地史学講座を担当された。この間、昭和61年11月から同63年11月まで京都大学評議員をつとめられ、平成元年3月停年退官、同年4月京都大学名誉教授の称号を授与された。その後、同年4月2日信州大学理学部教授に就任、平成3年3月31日停年退官、同4年4月1日より同11年3月31日まで徳島県立博物館館長を務められた。

先生は、永年にわたって地質学・古生物学の教育・研究に努められたが、特に新生代の哺乳類化石の研究

に注力され、長期にわたり日本の古脊椎動物学分野を牽引された。中でも、長鼻類の進化史を精力的に研究され、更新世の日本に生息していたナウマンゾウを独立種と認定するなど、数々の重要な成果を挙げられた。また、野尻湖の発掘をはじめ、全国各地で脊椎動物化石の発掘調査を指導された。

一方、教育面では、現在国際的に活躍している数多くの研究者を育てられた。加えて、普及書の執筆や、自然史博物館設立の指導など、研究成果の普及や社会教育の充実にも大きな足跡を残された。また、学会運営にも貢献され、日本地質学会や日本古生物学会において名誉会員に列せられた。以上の功績により、平成18年には瑞宝中綬章を授与された。

(大学院理学研究科)

### 藤永 太一郎 名誉教授



藤永太一郎先生は、6月4日逝去された。享年95。

先生は、昭和16年京都帝国大学理学部を卒業し、助手に就任された。昭和21年同講師に昇任され、同31年京都大学

理学博士の学位を授与された。昭和32年京都大学理学部助教授を経て、同35年同教授に昇任され、化学教室分析化学講座を担当された。昭和37年から11年間地球物理学研究施設(※現在の地球熱学研究施設(別府))教授、同38年から10年間瀬戸臨海実験所(白浜)教授、同45年から3年間大津臨湖実験所教授を併任された後、同50年から2年間機器分析センター長(※現在の低温物質科学研究センター長)、同52年から5年間瀬戸臨海実験所長を歴任された。昭和57年停年により退官され、同年京都大学より名誉教授の称号を授与された。

先生は、分析化学、陸水化学、海洋化学などの領域において輝かしい業績をあげられた。特に微量電気分析化学法の開発および琵琶湖の環境化学研究は、国際的、社会的にも大きな影響をおよぼした。また数多くの人材を輩出し、学問の進歩に貢献された。

本学在任中はIUPAC正委員、日本学術会議会員、日本分析化学会会長、停年退官後は神戸学院大学教授、奈良教育大学学長、財団法人海洋化学研究所理事長などの要職を務められた。また近畿化学工業会の「京都化学者クラブ」や本学名誉教授有志による「一木三水会」といった好学のサロンを主催され、終生「説・楽・君子」を実践された。

これらの業績により、日本分析化学会賞、タランタ・ゴールドメダル、日本学士院賞、ロバート・ボイル賞、勲二等旭日重光章などを受けられた。

(大学院理学研究科)